ペリーより強い軍艦を作りたいとの幕末、明治の人の「夢」が帝国大学を作り、世界一の戦艦「大和」となって結実します。そして「大和」の沈没とともに帝国大学も終わります。

戦後、京都帝国大学は第三高等学校と一緒になって、京都大学となります。京都大学の学風は自由です。自由すぎるのも困りものだとの議論が最近出ているようです。私たちのころは官僚になる人はほとんどいなかったのですが最近は多いようです。

今年、大学は法人化され、また大学は大きく変わろうとしています。国民大衆に役立つ大学になって欲しいと念じています。

大学卒業後は三井不動産㈱に入社し、ここでも最初は剣道部に入りました。三井不動産㈱には道場が無かったため、すぐ前の日銀の道場で日銀の人たちと一緒に剣道をやっておりましたが、程なく竹刀をゴルフクラブに換えて今日に至っております。

剣道部の付き合いは高校も大学もいまだに続いております。ともに汗を流した人たちとの付き合いだけでなく、世代を越えて先輩、後輩として付き合えるのも剣道のお陰と思っております。

4年前に京大剣道部に三条高校から後輩が入りました。彼は私の子供と同じ世代ですが、この間、毎年帰省すると私を尋ねてくれました。彼がこの春卒業して京大剣道部のOB名簿の出身校欄に私と同じ「三条高」と載ったのは嬉しい限りです。

会　員　の　声：　下手なゴルフを楽しむ　　落合益夫

床につくとドーンした痛みの腰痛で眠れず病院で診てもらうと、先生いわく「この腰は注射や薬では治らないよ」、「天気のよい日にゴルフをやりなさい」これが処方でした。

当時47才、練習場でクラブを握って体を回すと錆びたドアーのように「ギギー」と音がする、もともと身体が硬いのにゴルフは無理、やっと当ったボールは右左と勝手に飛んで行く、何度かやめようと思いました。

しかし腰痛のためにと、練習場通いゴルフ場へは年30回位は行き17年が過ぎた今、ゴルフが大好きになりました。もっと楽しむためには、色々の人と、方々のゴルフ場で、プレッシャを避けて、余裕を持って、こんなことを心掛けています。

今年の実績は53回でスコアーは93．4です。遠征は別府、菅平、北軽井沢、韓国、シンガポールでした。

7月は恒例の韓国遠征では手入のよい素晴しいゴルフ場で、気の合った仲間と二日間を楽しみました。8月はヨネックス女子オープンのプロアマ戦で塩谷育代プロ（愛知県　43才　20勝　後姿は23才）と同伴しました。私がバンカーを均そうと均木を手にしたら、塩谷プロは素早く均され恐縮し、ゴルフのマナーの大切さを再度認識しました。

11月は社員旅行でシンガポールのセントーサ島でのゴルフでした。13年前と同じ素晴しい風景のコースを予約しました。ボールが右なら海ポチャ左ならブッシユと難コースでしたが、椰子の木の後に行ったボールが前のフェアウェーに、ブッシュのボールはラフにと、フィリピン人出稼キャディーの仕業ですが皆さんスコアーが良くなって笑顔でした。

が、生徒の方は惜しくも決勝戦で敗退し、国体出場はかないませんでした。三高の剣道部では大竹保男さん佐藤広志さんらの先輩から剣道の他にもいろいろ御指導いただきました。

高校の剣道部の先輩があまりにも良い先輩でしたので、大学も剣道部に入りました。今、思うとこれが失敗でゴルフ部に入っておけばよかったと思っております。その後の人生に全く役に立たない剣道より、ゴルフ部に入っておればこれだけゴルフに悩まずに済み、握りも取られず逆に頂けたと思うからです。

大学は京都大学でしたので、三条の三高と京都の三高で剣道をやった次第です。といいますのは当時の京大の剣道部は旧制第三高等学校（三高）の道場を使っており、「逍遥の歌」や「琵琶湖就航歌」などの三高寮歌を歌っておりました。

京大の剣道部は大学と同じく自由をモットーにして、民主的に運営されておりました。関西の大学では1年生、2年生とは言わず、1回生、2回生と言いますが、京大剣道部では1回生も4回生も平等でした。たとえば、対外試合などで剣道の防具を持ち歩くときは、私立の多くの学校では一回生が選手や上級生の防具を持たされていましたが、京大の上級生は「選手は身体が出来ている。一回生はまだ出来ていないから1回生の防具は選手が持ってやるのが自然だ。」と言っていました。道場の雑巾掛けなども一回生より上級生の方が熱心で、これが足腰を鍛えるに一番いいと率先してやっていました。私大との試合などではその雰囲気の違いに唖然としたものでした。

京大剣道部の初代師範は大日本武徳会剣道師範で武道専門学校（武専）校長をされ、剣聖と言われた内藤高治先生（1862～1929）でしたので、その伝統を受け継ぎ正統派剣道を自認していました。内藤先生は漫画雑誌「ビッグコミックオリジナル」連載の「龍－RON－（ロン）」で主人公「龍」に剣の道を教えた武専校長として登場します。それゆえ「ビッグコッミクオリジナル」は私の愛読誌です。

私たちの時代の師範は斉藤正利先生で、武専出で大阪府警の主席師範を勤められた方でした。現役の時は大変強かったと思いますが、当時は好々爺といった感じでして面の奥ではいつもニコニコされているのですが、剣尖が鋭く全く撃ち込めませんでした。斉藤先生は新潟出身でしたので特別可愛がっていただき、よく御自宅で御馳走していただきました。

対外試合では全日本学生選手権、関西学生選手権等多くありますが、対東大戦が一番の関心事で、会場を東大、京大交互に毎年11月にやっております。やり方は部員のほとんどが出る総当たりに近い25名戦で対戦と抜き戦両方やっております。普通の団体戦は代表5名による対戦ですが、東大戦では部の総力戦となっており、雌雄が決するまでやります。東大は赤胴に白い剣道着なので子供のころはやった「赤胴鈴之助」を思い出させました。

そのほかユニークな試合では7帝戦（7大戦）といった旧7帝大（東京、京都、東北、九州、北海道、大阪、名古屋）の試合があります。これも会場は各大学持ち回りです。また奈良女子大の薙刀部との試合もありました。薙刀との試合は最初、面食らいました。大阪府警、京都府警との試合もありましたし、遠征して自衛隊ともやりました。警察は強かったですが、自衛隊は弱かったです。こんな

に弱くて、いざと言うとき大丈夫かと心配したのを覚えています。高校の先輩の佐藤広志さんも警察官になられましたように、警察は剣道の強い学生、生徒を多く採っていましたが、自衛隊はやっと隊員を集めていた差だと思います。

剣道部は戦後、軍国主義的ということで進駐軍により禁止されていましたので、OB名簿はじめ戦前の資料は終戦時に焼却処分され、全くありませんでした。私が入学した当時は、まだ戦後剣道部が再建されて間が無く、名簿から抜けている戦前のOBを発掘して名簿を作成しておりました。

私は２回生の時マネージャーの責任者の主務をやらされました。ほとんどの大学ではこの役は４回生がやっていましたが京大では２回生がやりました。全国を回って試合をするものですから部の運営にはお金が要りましたので、マネージャーとしては先輩回りをして金集めをするのが大事な仕事でした。戦後のOBはまだ若くて人数も少なかったので、その当時、社会の要職についておられた人が多かった戦前のOBを一人でも多く探し出してOB名簿を整備、作成することがお金を多く集めるためには必要でした。戦前のOBは私の父と同世代以上の人たちでした。三高より四高、五高、六高、七高、姫高、水戸高などの出身の人が多く、私たちと三高寮歌を一緒に歌うわけにもいかず、共通の歌として「祇園小唄」などを歌い、多くの先輩からお酒を御馳走になりました。

このOB名簿作成過程で昭和18年卒の文科系のOBがほとんど戦死されていることを知り、愕然としました。時の政府は昭和18年９月にそれまでは兵役を猶予していた文科系学生の徴兵猶予を止め、12月に一斉に軍隊に引っ張りました。翌19年には徴兵年齢を19歳に下げたため、大学に文系の学生がほとんどいなくなり、学半ばにして多くの学生が戦陣に斃れ、２度と大学に戻りませんでした。剣道部でも学徒出陣した先輩のほとんどが戦死しています。その多くは特攻ということですが、大学を卒業していないため卒業年次がなく、OB名簿には載っていない忘れられたOBとなっています。これは大学の卒業者名簿も同じで、これでは「英霊」も浮かばれません。

学生に限らず多くの人が殺される戦争の悲劇を２度と繰り返してはならないと日本の戦後が始まりましたが、最近は「小泉首相の靖国参拝」、拉致問題や東シナ海の資源問題に絡んだ戦前の「朝鮮征伐論」や「支那鷹懲（ようちょう）論」もどきの勇ましいタカ派論調が多く、また若者はじめ多くの人が戦争で殺される時代にならなければ良いがと心配しております。

２回生の、年が明けた昭和43年（1968年）の１月に佐世保にアメリカの原子力空母エンタープライズが入港するという事件があり、これが70年安保闘争の幕開けになりました。私も佐世保に駆けつけ機動隊の催涙ガスを目いっぱい浴びて来ました。当時の佐世保の市民はエンプラ寄港反対に全国から集まった学生らを歓迎して炊き出しなどをしてくれました。佐世保のおばさんからもらったおにぎりのおいしさが今でも忘れられません。５万人規模の阻止集会が開かれ、反対運動の連帯感は盛り上がっていました。

３回生になると大学では学生運動はますます盛んになり、大学は道場も含め学生により封鎖され、剣道どころではなく竹刀をゲバ棒や鉄パイプに持ち替えてより「実戦」に近いこと毎日やるようになりました。この年の５月にはパリの学生街カルチェラタンで「５月革命」と言われる大規模な学生運動が起き、「ベトナム反戦」を旗印にした「反戦・反米」の学生運動は世界的な運動になりました。運動の国際的連帯が一つの大きなテーマになり、反米の拠点と見なされていた「パレスチナ、キューバ、北朝鮮と連帯して戦おう！」と言ったスローガンも大学内で目に付きました。一部の学生が後ほど「日本赤軍」としてパレスチナや「よど号事件」を起こして北朝鮮に行くわけですが、私が北朝鮮やパレスチナに行かなかったのは運だけです。

それに付けても、当時は原子力空母の一時寄港だけであれだけのデモが起きたのに、ついこの前の10月末に日米両国政府が横須賀を米原子力空母の母港にすることに合意したと発表したのに学生がまるで反応しないのは隔世の感があります。

もっとも自衛隊が海外派兵されるという当時はまったく考えられなかったことが実際起こっていても学生始め大規模な反戦運動が起きず、逆に総選挙では自民党が大勝し、小泉内閣支持率が上がる始末です。反戦の歯止めがなくなってしまったのかと本当に心配です。

京都大学のことに少し触れてみます。日本の大学は幕末にペリーに恐喝され、開国させられたことに由来します。当時の政権を担っていた幕府はこれに対応するため欧米から軍事と外交を学び、専門家を育てて欧米に負けない軍艦や大砲を持った軍隊と外交官を作るため蕃書調所を作ります。明治になるとこれと医学校が一緒になり、東京に帝国大学ができます。

当時の文部官僚の賢いと思うところは、大学の先生は高度な学問をやっているので外部からは研究の中身も進み具合も分かりません。それで、明治30年に日清戦争の賠償金を基にそれまでは東京にただ一つしかなかった帝国大学の半分の予算で京都にも帝国大学を作り、競争の原理を持ち込みました。半分の予算の京都帝大に負けたら具合が悪いので東京帝大の先生も懸命に研究するだろうし、京都帝大の先生も倍の予算を使っている東京帝大の鼻を明かそうと頑張るだろうとの策です。

このような建学の経過から、東大は日本を代表する大学として多くの予算を使って優秀な技術者、官僚を育成し、進んだ欧米の学問をすばやく忠実に翻訳して日本に紹介するのが重要な役割となりました。一方、京大は少ない予算で東大に勝つために東大とは違う独創的なことをやらざるを得ませんでした。それが多くのノーベル賞受賞者を輩出する原動力になったと言われています。

その後、帝国大学は先ほどの７帝大の他、朝鮮に京城帝国大学と台湾に台北帝国大学が作られ全部で九つになり、帝国日本の軍事力増強と天皇のための官吏輩出にそれぞれ競争しながら貢献してゆきます。

帝国大学では大臣より高額な給与を払って欧米人の学者を教師として招聘して授業は英語、ドイツ語、フランス語、教科書は原書を使って行われました。学生は語学を収得する必要があったため、帝国大学の予備教育機関として旧制高校が作られました。一高（東京）、二高（仙台）、三高（京都）、四高（金沢）、五高（熊本）、六高（岡山）、七高（鹿児島）、八高（名古屋）などのナンバースクール、続いて新潟、松本など都市の名を冠した高等学校が全国に作られていきました。この中には寮歌「北帰行」が有名になった旅順高校もあります。私立では三菱の岩崎家が作った成蹊高校や関西の財界人の作った甲南高校などがあり、最終的には39の旧制高校が作られます。